



鶴亀文黒大椀



朱内黒湯次



根来面取小壺



朱汁椀

たくみ企画展

漆工房創元舎 佐藤阡朗漆展

会期 平成十六年七月二十四日(土)～二十九日(木)

七月二十五日(日)は営業いたしません。

会場 銀座たくみ 二階サロン

営業時間 十一時から十九時まで

日曜日・最終日は十七時半まで

たくみ

Craftsmanship

特集 佐藤阡朗漆展
特集 芹沢銈介物語絵展

第13号

きものデザイナー 大塚末子の人と仕事

大塚先生を、たんなるきものデザイナーとよんでよいのだろうか。確かに大塚さんは戦後に彗星の如く現れた、新しい着物のデザイナーであった。

日本の着物を、従来の和装の着方に把われず、着易く、活動的で、染め織りの美しさがより映えるような工夫をこらし、お末羽織、ツーピースきものなどさまざまな提案をしてきた。

とりわけ黄八丈を用いたお末羽織が折から来日中の陶芸家バーナード・リーチに喜ばれ、評判となった。お末羽織は着尺半分を使ったもの、合理的で着易く、一時大流行をした。

じつは大塚さんはたくみの出身である。一九三五年(昭和十年)、文化服装学院本科を卒業した大塚さんは、戦後ご主人を亡くして上京。一九四九年「装苑」編集部に入社、その後一九五二年に「たくみ」に入り、新設された

二階の染織部の担当となった。

かたわらデザイナーとして高島屋に作品を出品、また新聞や雑誌にも前記の新しいきものを発表、独立する。そして一九五四年「大塚きもの学院」を創立、さらに一九六三年には「大塚テキスタイルデザイン専門学校」を設立し、着物や衣服、染織全般にわたる専門教育のカレッジを作った。

教育者、デザイナーとしての仕事のほかに、大塚さんはニューヨークでの「きものショー」などをプロデュースし評価を得たが、なかでも一九七七年のショー「大塚末子・直線を着る」(中野サンプラザで開催)は絶賛を浴びた。

このときのショーで紹介された作品の一部を中心として先般六月九日から二十七日まで、神奈川県民ホール・ギヤラリーで特別展「生誕一〇〇周年—大塚末子 人と仕事」が開催された。この展示を見て、大塚さんの後輩、教え子がその志をどう受け継いでいくのか夢を託さずにはいられない。

(志賀直邦)



朱内片口

当時は暮らしの中心にあつたものが、天地がひっくり返つたかのように姿を消し、家庭の有様も変わった。食事の姿や内容も人の立居振舞も、方言も言葉の常識も変わってしまった。一言に「生活に健康的に生きてゆく器を」と表現しても所詮今の暮らしに合わせてしまう意味になってくる。単に私は昔の姿が懐かしいと言っているのでは無い。自然の風景と無理なくお付き合い

て、季節を迎え感じ、歳時と共に有つたことが、これ程までに無機的な時代に生きざるを得なくなつた事を「これでいいのかな?…」と強く思う丈なのだ。

漆器を生産するには、産地を形成して前述の如く優れた道具や材料を日々生産してくれる人々が必要で、それ等のネットワークが大切になる。生産手仕事の世界は滅亡しかかつていて、僅かに個人の作品作り技術に変化して継がれる。継いでいるつもりでもその実体は脆弱なものに変化しつつける。

「何でもあり」の時代は「何事も無い」ものを遠ざける。

生業の生産技術は厳しい。素早い、根気強く、仕事にむらがなく損じが無い。

それらはもうすぐ消え去つて、観光地の見せ物実演と化するだろう。

人の、美を受け取る目が落ちてゆくとしても、普遍的美を感受する力はあ

るはずだ。時代を超えて、年代に関わりなく。

例えば、中国雲南省の農村の柵田や、全面菜の花の段々畑に、春の夕暮れ、牛と共に働く人々が日没と共にまるで影絵に変化してゆく様子を音もなく、時を忘れてじーっと眺め、やがて山裾に灯りがポツポツと光り、声をかけ合いながら家路に就く姿を美しいと感じない人は恐らく無いだろう。

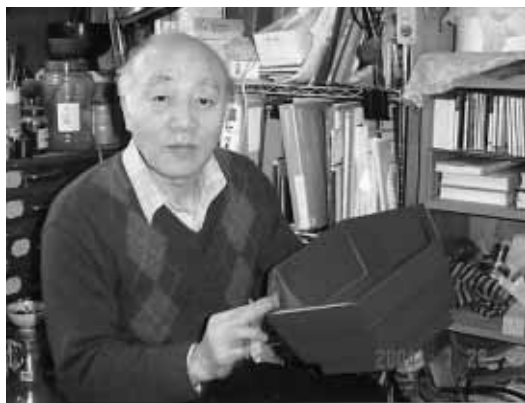
物と向き合う時、私が道具と向き合うように、その背景にあるものを感じ、大切に使用させて貰える丈の自分に昂めてゆこうと思える物達と出逢いたい。人の心の奥底にあるに違いない美の本質を見抜く魂に期待して物を造つてゆきたいものだ。

生産技術は人の手の輝かしい歴史を残して幕を閉じてゆくのを感ずる。

何事も無い美しさを、静かに大切に楽しめる「美の王国」は未だ遠い。

（木曾漆工）

手の生産技術



作品を手にする佐藤亘朗さん

私が幼少の頃、漆器は勿論、桶類、

水甕、家具、反物、殆どどの生活器具は手作りの生産であった。生まれが八戸市であったから尚更遅れていたのか

も知れない。

その職人街に入り浸っておじいさん達と親しくなつてゆくに従つて、その人々の手さばき、手際、段取り、始末が、まるで手品師のように見えていたのを覚えてゐる。何か「偉いんだな！」と感心し、不可能を可能にする人々に見えたものだつた。いつまで見ていても飽きるという事もなく、鍛冶屋さんも、馬具屋さんも、箆笥屋さんも、作業中は何か声を掛けるのも恐ろしいように思つた程であつた。

道具が冴えていた。流れるように作業してゆく手先にある刃物、皮細工の刃物、桶屋の外丸鉋、馬蹄を当てがう時の爪を削る鎌のようなナイフとヤスリ、建具屋の鋸、其れぞれが仕事を成

佐藤亘朗

す為、仕上りの美しき、能率の向上の為、無駄の無い良い働きを示していた。作業は段取りから始まる。段取りは前日迄の道具、材料の片付けの良さが可能にする。

仕上りはすでに頭の中にある。決まつた時刻に（朝早かつた）始まつて、二時間置きに十五分程休憩が入る。大工も左官も庭師も紺屋も皆同じであつた。

私は幼いながらそれ等を見て歩くのが、こよなく好きで遅く家に帰つて叱られるのが日課のようなものであつたが、それ等を商つている父よりも、はるかに彼等が偉く見えたしその姿に憧れていたように思う。

多摩美大彫刻科在籍中、塗物職人に成りたくて、師に内弟子に入った時から気が付けば四十年に成りかけている。時代は移つて変化した。一番大きく変貌したのは、人々の暮らし振りであつた。

特別展

芹沢銈介物語絵展

会期 平成十六年七月二十四日(土)～二十九日(木)

佐藤阡朗漆展に併催

会場 銀座たくみ 二階



文化の反逆「稿 成りてのち」



文化の反逆「商家の妻女」

芹沢銈介の物語絵の独自性と愉しさについては、本誌でも四回にわたって述べてきました。平安朝以来、絵巻物や各種の絵本の伝統のあるわが国で、芹沢銈介の作風はもともと日本的で、正統を継いだものといつてよいでしょう。

今号も含め、図版も八作品、二十六葉を紹介してきました。いずれも型紙による合羽摺、又は型染ですが、その絵の多様さと芹沢ならではの格調は他の画家の追隨を許さないものがあります。

今回、額装あるいは本紙のまま展示し、ご覧に入れる予定です。作品の種類、点数も多く取り揃えておりますのでお楽しみ下さい。

出品作品

絵本どんきほうて、法然上人絵伝、文化の反逆、極楽から来た、津村の小絵馬、十三妹、その他芹沢作品いろいろ。

本のひろば

「愛してるって、どう言うの？」 高遠 菜穂子

「日韓交流のさきがけ―浅川巧」 梶村 彩

先日ある会合で、朝日新聞のアジア

担当記者であった井川一久氏の話を知

きわが意をえた思いであった。井川氏

は、アジアは一つというが民族、国家

間の相互理解や共生は、宗教や文化、

歴史的な相克からなかなか難しいとい

う現実がある。だがそれをいま出来る

のは日本人ではないのか。

日本こそアジア諸国の協力、交流の

媒体となりうる国だと思ふ。それには

まず日本人がアジア各地に拡散して、

日本と、現地居住者としての二つのア

イデンティティをもつことが、真の理

解への糸口となろうというのである。

そしていま、何の偏見も先入観もな

くアジアと向き合い、そこから多くを

学びとっている若者たちがいる。その

若い女性二人、彼女たちの書いた著作

二冊をぜひ紹介したい。

一つは高遠菜穂子さんの「愛してる

って、どう言うの？」（文芸社刊）、

もう一つは梶村彩さんの「日韓交流の

さきがけ―浅川巧」（搖籃社刊）であ

る。

高遠さんの本は、彼女がイラクで人

質になる前にインドやネパール、タイ、

カンボジアを旅し、あるいはボランティア

イア活動をした経験をもとめたもの。

ベトナムでのストリートチルドレンと

の出会い、スキンシップと愛を求め

る子供たち。仲間とのボランティアの仕

事とおして、それが“魂の仕事”で

あることを彼女は学ぶのである。

高遠さんの海外での行動が、真心か

らのものであることがよくわかる。

梶村彩さんの本は、二〇〇二年、彼

女が中学二年のときの夏休みの自由研

究によるものである。そのきつかけは、

朝鮮人のよき理解者として知られる浅

川巧が彼女と同郷で、小学校の大先輩

であること知ったこと。さらに高崎宗司

氏の「朝鮮の土となった日本人」を読

んで感銘を受けたことだという。

梶村さんの勉強と調査、そして関係

者への的確なインタビューは、高崎氏

も序文で書いているように彼女独自の

ものである。巧の人柄や業績、浅川巧

を愛し心を寄せた多くの先達にも触れ、

さらにその時代の背景を「近代におけ

る朝鮮と日本」という章にまとめてい

る。その適切な資料の引用と構成は、

仮にどなたか教師の指導があったとし

ても脱帽である。浅川巧のことだけで

はなく日韓の相互理解を考える上でも

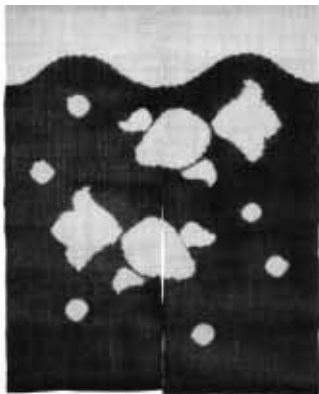
良書の一つといつてよい。

（志賀直邦）

たくみ歳時記 麻のれん

涼しい柄の麻のれん二枚を
ご紹介します。

青地の中央に流れる一筋の
滝ののれんは、静岡の大橋秀
雄さん作の型染のもの。秀雄さんは芹
沢銈介の直弟子で、現在も毎年新柄を
出し続け、のれんだけでも百柄以上の
オリジナルがあります。



絞り染「金魚」 ¥28,000



型染「滝」 ¥20,000

青地の中を泳ぐ二匹の金魚ののれん
は、東京の小島貞二さんの絞染です。
貞二さんは、芹沢銈介の弟子であるお
父様の恵次郎氏とくじろうから教えを受け、また、
インドや日本の郷土玩具からインスピ
レーションを受けて、絞りの他に型染
など様々な作品を発表し続けています。
涼風を感じる麻のれんは、間仕切り
にはもちろん、タペストリーなどとし
ても、和の空間を演出する逸品です。

(豊岡)

あとがき

今号に執筆いただいた佐藤亘朗氏は
漆工の第一人者、たくみでも今まで何
回か作品展をお願いしている。漆器は
縄文時代から日本人の暮らしのなかに生
きつづけてきた。中世、近世において
も根来塗に代表されるように、われわ
れの生活の中心に据えられてきた。

いま日本人の本来の質実で、自然と
調和した美意識が衰弱しつつあること
を佐藤さんは憂うのである。漆展の初
日夕刻の「漆のふしぎな話」トークを
ぜひお聞きいただきたい。(S)

本のひろばで紹介した高遠さんの「愛
してるって、どう言うの？」は書店で。
梶村さんの「日韓交流のさきがけ」はた
くみにご注文下さい。一〇五〇円です。

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八ー四ー二
発行責任者 志賀直邦

電話 〇三ー三五七ー二〇一七
FAX 〇三ー三五七ー二一六九
振替 〇〇一〇一ー二一三五六五九
定価 六〇円(税込)



十三妹「旅の楽しみ」



極楽から来た「往生要集の披講」



十三妹「金満少年」



極楽から来た「高倉天皇ご授戒」



十三妹「焼打ち成功」



極楽から来た「美福門院撫育體仁親王図」